

■研究十二月往来(41)

面打「天下一越前」は何者か

宮本圭造

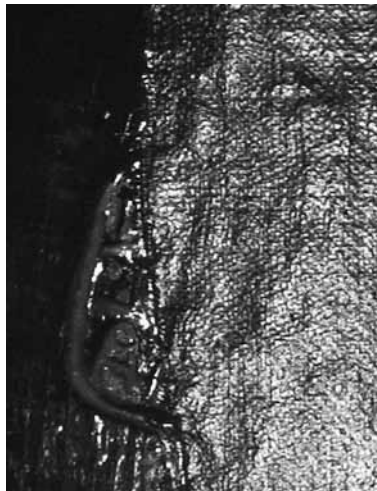
鏡仙会が所蔵する能面には「筋男」が三面ある。うち一面は徳若作と伝える古作で、鏡之丞家が観世大夫家から分家した際に同家から分与された名物面。その他の二面はいずれも江戸期の作で、うち一面には出目甫閑がその父出目李之助の作と極めた朱漆書きがあるが、もう一面には面裏に焼印が捺されているもの、補修の布貼によって焼印の大部分が隠れており、これまで作者不明とされてきた面である(写真1)。



写真(1)

ここでは、その作者不明の筋男について考えてみたい。実は筋男面の焼印は全てが布貼

の下になっていくわけではなく、左端部分が僅かに顔を覗かせている(写真2)。そこには二字程度の文字の断片が確認でき、作者特定



写真(2)

の有力な手掛かりを提供しているのだが、これを江戸期の面打の焼印と逐一照合したところ、「天下一越前」の焼印の字体と完全に一致することが確認できた。写真3は高知城歴史博物館蔵の万媚に捺されている「天下一越前」の焼印だが、両者が同一の印であるの是一目瞭然と言えよう。筋男面の作者は「天下一越前」と確定してよいであろう。

しかしながら、この「天下一越前」がいかな



写真(3)

る面打であるのか、現在の研究では何一つ明らかになっていないのである。「天下一越前」印の面はそもそも現存作例が少なく、現在知られているのは、今回新たに追加された鏡仙会蔵の筋男のほか、高知城歴史博物館蔵の万媚・平太、福岡市博物館蔵の釣眼、春日大社蔵の舞楽面陵王・二ノ舞・採桑老・還城楽と十指にも満たない。過去には、出目は閑や兒玉近江と「天下一越前」との関係を説く説もあったが、いずれも決め手を欠いており、「天下一越前」の素姓は謎に包まれたままであった。筆者も以前、「天下一越前印が「出目友閑の後継者で、「面打タズ」と『仮面譜』に見える出目助左衛門の印」である可能性を考えてみたことがあった(拙稿「土佐山内家の能狂言面と山内容堂」土佐山内家の能楽(二〇一八年、日本芸術文化振興会)。「天下一越前」の焼印の形態・書体が大野出目家の是閑・友閑のそれと類似すること、桃山・江戸初期まで時代が上がる作とは考え難く、友閑の次世代あたりの作と見るのが妥当と判断したからで

ある。しかしこれとて確たる証拠があつたわけではなく、面の作風に基づく主観によるところが少なかつたのである。

ところが意外なところで、「天下一越前」の正体に繋がるのではないかと思われる資料に出くわした。長崎県対馬市厳原町の八幡宮神社には、かつて府中藩(対馬藩)主催の神事能に用いたと思われる能・狂言面がいくつか所蔵されており、同社の宝物館で見ることが出来る。私が訪れた時に展示されていたのは、野干・鷹・大癡見・不動などの能面、武悪・祖父・登鬚・猿などの狂言面、その他、陵王や鼻高面を含め、計十六面であつた。能・狂言面の多くは中央の作と何ら変わらぬ整つた様式を見せており、中には喜多家本面の写しの系統と思われるものもあつて、高い水準を保っていることに驚かされたが、なかでも目を引いたのが、キャプションに「波多野越前」の作と記されている大癡見面であつた。これは観世家本面の大癡見に代表されるオーソドックスな型の面で、彫刻も彩色も、専門家の手になることが明らかかな優れた作であつたが、その作者「波多野越前」の名を、これまで全く聞いたことがなかつたからである(作者名が印記によるものか、銘記によるものかは不明)。

果たして、波多野は府中藩に仕えて細工御用を勤める面打の家系であつた。長崎県対馬歴史研究センターには府中藩宗家の古文書が大量に残されているが、そのうち御徒身分の家中の由緒書を収めた『御徒』に、波多野家の由緒が収められている。それによると、同家の初代は重右衛門といい、寛文二年(一六六二)

六月、「御細工之用三三人扶持三石二而御抱」となつた。寛文十年には息子の新平も出仕するようになり、天和二年(一六八二)、清右衛門と改名、翌天和三年に父の家督を相続している。父重右衛門は貞享四年(一六八七)の没、清右衛門は元禄元年(一六八八)の没という。宗家文書『家業人一番』には、初代重右衛門につき「面打其外諸細工人」との注記があり、また、府中藩には「清右衛門作」の能面が多く所蔵されていた(後述)。すなわち、波多野家が少なくとも二代にわたつて府中藩御抱えの細工人として能面を打つていたことが知られるのであり、この二代のうちの何れかが「波多野越前」を名乗つていた可能性が想定されるのである(なお波多野家といえは越前国に所領を持ち、永平寺の建立にも関わつた越前波多野氏が想起される)。

しかし、この波多野越前を「天下一越前」と結びつけるには、なお多くの傍証が必要であろう。ここで注目したいのは、宗家文書『国表毎日記』天和三年十二月一日条の記事である。同日条には波多野重右衛門が老年のため家督を息子に相続したい旨の願書が記されるが、そこに「先年舞樂之面打上申候様<sup>ニ</sup>被仰上、京都<sup>江</sup>被差登、永々逗留」とあり、彼が貴命によつて京都に上り、舞樂の面を打つていたことが知られるのである。奈良の春日大社に「天下一越前」印の舞樂面があることは先述の通りだが、その面箱には「寛文九己酉十月九日、禁裏 御寄進」と墨書があつて「春日大社の舞樂面」(一九八二年、春日大社宝物殿)、寛文九年禁裏よりの寄進であることが

分かる。そして、波多野重右衛門もまたほぼ同時期、京都に長期滞在して舞樂面を制作していたのである(天下一越前の受領号も禁裏発注の舞樂面制作の功によるものか)。

もう一つ、注目しておきたいのが、府中藩の能道具を記録した文化七年(一八一〇)八月改『御能衣装帳』(宗家文書)である。そこには、当時府中藩が所持していた八十二面の能面の目録が記載されているが、そのうち「作不知」の三十二面を除くと、一番多いのが友閑作の十四面で、他の世襲面打は、井関河内作の二面、出目李之助作の一面が挙がっているのみである。府中藩がいかに出目友閑と深い繋がりを持っていたかが窺われる。友閑作に次いで多いのが「清右衛門」作の六面、他には「御国塗師源兵衛」作の三面、「越前」作と「孫次郎」作が各一面という内訳で、その多くが府中藩の細工人の手になるものであつた。すなわち、右の「清右衛門」が波多野重右衛門の子清右衛門と見られることは先述の通りである。問題は「越前」で、これが「天下一越前」すなわち「波多野越前」なのではないだろうか。波多野清右衛門と「越前」が別人とすれば、その父の重右衛門が「越前」を名乗つていた可能性が想定される。僅か一面だけと残存数が少ないのは気になるが、藩の能道具は江戸と国元で別々に保管され、藩主の御側用とそれ以外の御次用とが別置されるのが常であつたから、府中藩の能道具が他にもあつて、そこに「天下一越前」印の面がさらに多くあつたことは十分に考えられよう。

以上を総合すれば、「天下一越前」の焼印を

用いたのは、府中藩御抱えの細工人、波多野重右衛門である可能性が最も高いということになる。彼が府中藩に召し抱えられたのは寛文二年。それは出目友閑が亡くなった承応元年（一六五二）の十年も後のことであり、重右衛門と友閑との間に師弟関係があったかは不明である。重右衛門の府中藩召し出しを伝える『国表毎日記』寛文二年十一月十一日条の記事は、重右衛門につき「奈良寿法院弟子」と記している。彼は面だけでなく、鞍や弓矢など多様な細工物を手掛けたから、寿法院が必ずしも面打の師であったとは限らないが、年代的に見ても、重右衛門が友閑の直弟子であった可能性はかなり低いと見てよいだろう。あるいは、友閑没後、次代の出目助左衛門が面を打たず、家業の後継者がいないという状況を受けて、友閑と関係の深かった府中藩が波多野重右衛門を大野出目家の後継者とすべく取り立てた、といったことも十分に考えられるのではなからうか。「天下一越前」印の書体を除けば、その作風にあまり友閑との顕著な共通性を感じ取れないのは、そうした事情があったためなのかも知れない。

結果的に波多野重右衛門による大野出目家再興は実現しなかったが、彼は間違いなく府中藩の能に大きな功績を遺した重要人物であった。寛文以後、折々に自作の能面を藩主に進上している記事が『国表毎日記』に見えるほか、息子とは別に藤川茂兵衛という弟子を育てるなど、後進の指導にも熱心であったらしい。延宝六年（一六七八）には「世伴儀其職ニ仕度候得共、殊外細工不得手ニ御座候」として、その藤川茂兵衛

の藩士取り立てを願い出て、これを許されているが、彼の息子もまた精力的に面打御用を勤めたことは、先述の通りである。

興味深いのは、その波多野重右衛門が面打以外の分野でも、目立った活躍をしていることである。府中藩は將軍家や数寄大名の求めに応じるため、朝鮮から陶土の支給と陶工の派遣を受けて、釜山窯と呼ばれる御用窯を釜山の地に設けたが、波多野は寛文三年以降、しばしば朝鮮に渡海して、釜山窯での茶碗制作にも深く携わっていたのである。泉澄一氏『釜山窯の史的研究』（一九八六年、関西大学東西学術研究所）がその釜山窯に関する総合的な研究で、波多野の事績についても重要な指摘を行っている。先に言及した波多野に関する『国表毎日記』の記事も、全て泉氏の引用によるものであることを、ここにお断りしておく。

なお、「天下一越前」印の筋男が、どのような伝来の面で、それがどういった経緯で鍔仙会の所蔵になったのかは、残念ながら不明である。しかし、鍔仙会には他にも府中藩関係の面が所蔵されていた。面裏に「子有通」と朱漆銘のある小面がそれである。この面は寛永三年（一六二六）十二月、喜多七大夫が夢想によって「子有通」と命名したという由緒ある面だが、先述の文化七年『御能衣装帳』に「小面式面（中略）内巻面子有通、有之」と見えるのが、この面のことと思しい。とすれば、筋男も同時期に同所から入った可能性が考えられはしまいか。府中藩における波多野の事績とともに、今後さらに追及してみたい。

（法政大学能楽研究所教授）